

# 2016年夏のブルキニ論争の分析

## —1989年から2004年のヴェール論争と比較して—

東京大学大学院 田中浩喜

### 1 目的 —— ヴェール論争とブルキニ論争の比較

この発表の目的は、1989年から2004年のヴェール論争を比較対象として、2016年夏のフランスにおけるブルキニ論争を分析することである。ヴェール論争とは、公立学校におけるムスリム女生徒のヴェール着用をめぐる論争である。論点は、フランスの理念であるライシテをいかに理解するかであった。ブルキニ論争とは、公共ビーチにおけるムスリム女性専用水着「ブルキニ」をめぐる論争である。この論争は国内外で報道され、厳格なライシテのイメージを広めることとなった。

### 2 方法 —— 政治と司法の公式資料

そこで、データとして用いるのは、両論争に関連する政治家の発言、国務院の意見や判例である。本発表の特徴は、フランスの論争を一枚岩的に扱うのではなく、特に政治と司法の二領域に注目して資料分析を行うことである。前者に属するデータとしては、公布された政令や可決された法律が、後者に属するデータとしては国務院の意見と判例が挙げられる。さらに本発表では、当時の社会的文脈を考慮するために、メディア上で公表された知識人による意見表明も適宜参照する。

### 3 結果 —— ① 政治と司法の解離 ② アプリオリなヴェール理解 ③ 厳格なライシテ理解

分析の結果、以下の三つの共通点が明らかになった。第一に、ヴェール論争では1990年代半ばから、政治と司法のライシテ理解に解離がみられるようになる。ブルキニ論争でも、同じ解離をみることができる。第二に、ヴェール論争では、ヴェールをアプリオリに「女性差別」の象徴とみなすことで禁止が正当化されている。ブルキニ論争でも、同様のアプリオリなブルキニ理解をみることができる。第三に、ヴェール論争では、ヴェール禁止を正当化する道具として、厳格に理解されたライシテが参照されている。ブルキニ論争でも、同様のライシテ理解が示されている。

### 4 結論 —— ブルキニ論争はヴェール論争の「続き」である

以上から、2016年のブルキニ論争は、1989年から2004年までのヴェール論争の「続き」と言える側面をもつことが明らかになった。とはいえ、差異も存在する。例えば、公共空間概念の拡大である。ヴェール論争では禁止の空間が公立学校内に限定されていたが、ブルキニ論争では公共ビーチにまで拡大されている。これにはライシテの構成要素である「中立性」の理解が関係している。

### 文献

Laborde, C., 2008, *Critical republicanism: the Hijab controversy and political philosophy*, Oxford University Press.